THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, March 15th, 1954. No. 267

關西大學學報

第 2 6 7 号

昭和29年3月

経商学舎屋上より（千里山）

關西大學學報局

關西大學創立七十周年記念

拡充資金寄附募集に当つて

岩崎卯一

明治十九年（一八八六年）の創立時から昭和二十九年の現在まで、つまり約七十年に亘る関西大学のながい歴史は、他の諸大学と同じように、ひたむきな発展の一途をたどつている。明治二十二年（一八八九年）の第一同卒業生は僅に十七名にすぎない少教であつたが、昭和二十九年度に各学部から巣立つた卒業生は二千名の多数に上つている。近いうちには年々三千名以上の新校友をつくりだすであろう。数だけからみても、過去七十年間に、関西大学は百倍以上に発展している。

また、創立時の関西大学は、各種学校的な「関西法律学校」に過ぎなかつた。それは一つの法律塾であつた。それが十七年目には専門学校に成り、三十五年目には名実共に備えた大学に昇格した。すなわち旧制大学である。ところが、現在の関西大学は、四学部を以て構成された新制大学だけでなく、その上部に大学院と、下部に短期大学、高等学校、中学校、幼稚園とを附設した一つの綜合学園に変化している。公平に眺めて、今日の関西大学は、たしかにわが国私立大学の中堅である。

しかしながら、わが関西大学だけを切り離して観察し、その過去と現在との比較から得た発展相を眺めて満足したり、「私学の雄関大」などというようなお世辞に耳を傾けて喜んだりしていると、関大は即座に落伍する恐れがある。なんとなれば、眼を広く展けて望むと、東京の六私立大学（慶応・早稲田・日本・明治・法政・中央）も、関西の三私立大学（同志社・関西学院・立命館）も、つまり関西大学の競争校はことごとく、われわれ以上の熱意と精力とを傾けて、飛躍的な発展に努めているからである。いまは全く私学相互間の戦国時代である。一寸の油断をも許さない極限情勢である。

現在の関西大学の経営陣は、「教授陣の充実と研究設備の拡充」とを綱領とし鋭意その実現に努力している。この機を逸してはならないという機運が、学園の内外に溢れて来た。恐らく創立以来かつてない盛りあがりかたであろう。わが大学の一古参教授は、この現状を指して、「関大の上げ潮」と評した。快心な言葉である。

だから、関西大学に縁をもつ教授も学生もその父兄も校友も、心を一つにしてわれらの学園の発展に応分の援助を与えられるよう熱望して止まない。

（学長、校友会長）

長柄金吾

待望の母校創立七十周年の劃期的行事が明年度に迫つている。母校の内容とも云うべき教授陣や経営陣や職員陣の充実も学生教授に必要な図書の整備も日々に理想に近づいている。而して理想の学園として伸び々々と勉学にいそしめる学舎並びに附属設備も広大な千里山に天六に日々の工作が続けられて七十周年の記念日を飾るに適しい努力が進行している。五億二千万円の二十九年度予算も三月中に成立するであろう。この予算中には校友各位から母校七十周年を飾る内容外観双備の関大学園の理想境への愛の結集の浄財即ち拡充資金寄附金が予定されているのである。五万の有力なる校友から形成維持されている関大財政を補充するためにこの劃期的行事の実現に支障を起してはならない母校は校友の心のオアシスであるそして脈々として永却に保持発展を続けねばならない、吾々は母校を母体として社会文教に貢献したいものである。全国各地の地域及び職域校友会の強力なる活動と校友各自の母校愛の溢れる情熱から拡充資金の献納運動を推進しよう私も長女が関大商学部最初の女子卒業生として、この三月に母校を巣立つことになつた親子二代校友組の一員となつた訳である、又ささやかな私の事務所にも関大校友が数人居るので事務所も家庭も関大の廻長社会となつている現状である。全校友と共に母校の劃期的計画完遂の為めに精一杯の努力をして母校に対する報恩の誠を捧げたいと思つている。（校友会副会長）

襖から出て来た手紙

壺井義正

先頃書斎の襖をはがした処、下張りの中から数十通の手紙類が出て来た。この襖はもと狭山藩の家老下山家にあつたもので、恐らく同家の筐底に蔵せられていた書牘類を後になつて家の人が下張りに使つたものであろう。読んで行く内に種々のことが明になり、今日の世情に余りにも類似することが多くて、興味が尽きなかつた。特に年来不審であつた一事がこの御陰で訳なく解つて了つたので更に愉快になつた。些か私事に属することであるが、その二三を記して見ても今更親書の秘密を侵すことにもなるまい。

下山家は角兵衛重徳が当主であり、御勝手取締収納銀預りをつとめ食録二百石を食んでいた。その為に江戸藩邸からの勝手向の報告類が多く、又嫡子英太郎重暉の父宛書信が大部分を占めている。江戸詰の家臣は用人格の山上登佐藤良左衛門忠処の二人、之に配するに江馬岩二郎朝比奈喜内と前述の下山英太郎。其他末士の橋本力蔵が加はつている。江馬朝比奈及び下山の三人は共に重役職の家柄の嫡子で何れも二十才前後であることから見て、恐らくは遊学の意味で江戸にあつたものであろう。年次干支は何れにも明記されていないが内容から見て天保八・九年を外れないと思はれる。

崩壊期に入つた幕府政治の禀す社会不安はこの小藩邸にも多くの問題を起している。先づ家臣は打つゞく盗難に悩まされた。度重なる被害にも不拘一向に犯人が逮捕されず、又盗品が元の所へ戻つて居たり、紛失品が帳簿であつたりして、犯人が内外の何れにあるか判らず、社会的風潮とその綱紀紊乱を想はせるものがある。加之帳簿の整理に専心する用人の苦労を他目に、明に二百両の大金を横領したと疑はれる関係者が「明暮芸者妻吉をつれて」豪遊していたりしていて、山上登一人ではとても「こわき事」で「一人にては何分行届兼候と奉存候少しも早く同役を奉相願上げ」と援軍を乞ふている。一人と云ふのは同役の佐藤が殆んど無能に近かつた故である。佐藤は家庭が斉はず、遂に妻を離縁した。その理由は佐藤が下山に

歳暮述懐

白銀のさわにありせば世の中にいさかふ事の如何であるべき

幼なき末の女子の夜を寒み母はととはゞ如何こたえん

右荆婦年来存寄ニ不相叶是迄は勘辯仕候得共増長肝癖行末の処心配旁逗留離縁の内存に付内々愚詠奉入御覧候

と述べているのを見ても、生活苦が因と思はれる。元来忠処は和歌を嗜み文学を好んだ人で、決して劣つた人物では無いのであるが、其丈に経理の才に乏しかつたらしい。「良左衛門は隠居同様ニ而、月々小遣金何程と申ものを相渡可申積りに御座候。迂も良左衛門ニ而は取〆り出来不申候」と山上登の報告にある通り世間的には有能では無く、為に生活も安易では無かつたらしい。本来ならば安穏に楽しみ得る筈の文学的才能や性向が時勢の変化によつて不可能になつて了つたのであり、当時の社会状態は既に武士階級に対しても経済的安住を許さなくなつて来ていたのであろう。この人の離縁にからんで気の毒な事件があつた。山上登の書翰に

……御下屋敷御門脇之御土蔵へ盗賊入、錠前には別条無之、戸をはづし、良左衛門方の衣類斗り、子供のもの交り三十四品紛失仕候、外之品は壱つとも別条無之候。誠に貧すれば貧するとやら歎息仕候。旧冬質屋やかましく候故、質ものは不残受け戻し、家内離縁等にて是非里方へ返し候事故、家内のものも不残受け戻し申候、夫れをころりとやられ申候、正月早々に離縁に成候はば、家内のもの丈けはたすかり申候処、扨々残念之事候。いづれ其内には離縁と相成事、其節迄に古るものニ而も相調へ可申心得に御座候。又々四両と五両とは入用と、誠に当惑仕在候御察し被下度候……

とある。早く離縁していれば妻君のもの丈でも助かつたとは返らぬ愚痴に近いが、貧すれば貧するとは誠に酷評である。然し経理に暗い者に対しては武士と雖も既にその経済的基礎は崩れ初めている。まして末士の橋本力蔵の如きは首も廻らぬ程の借金、更に打つゞく家族の病気にこの上の借金も相ならず、「江戸小米の者のくらし方如斯」と衷情を打明けて漸く下山から一両二分を恵まれている。「之にて自信出来彼是快方にも相成候。是と申も太夫様の御陰と朝暮難有御恩子々孫々至上に申伝へ致度心底に御座候」と三拝九拝している。その文字が稚拙な丈にその窮状も想はれて気の毒になる。処が橋本の貧乏は元来が本人の大酒癖にあるとあつては、又身から出た錆とも考へられ「かゝ(嬶)も酒すきにて折々は用い候様子」と山上が腹を立てるも無理は無い。佐藤と云い橋本と云い時勢の落伍者で

あり犠牲者であるが、山上に取つては並大抵の負担では無つたであろう。山上は頼母子講を作つて橋本の救済を策している。

然し斯様な多事の中にあつても人々は又折節には相集つて痛飲し楽しく故郷の事を語り合つたりしている。殊に人々を熱中させたのは揚弓であつて、何某は何十中誰それは何十何中とその腕を常に詳細に手紙に書添えてまでいる。多分万人共通の話題であつたのであろう、恰も今日のパチンコの如く。之も又泰平の余徳であろうか、或は又崩壊直前の一安寧であつたのであろうか。泰平の余徳と云へば武士階級の意識の上にも大変動があることが窺れる。

……盗人朝比奈へ入掛ケ、物紛失之由承り申候。江戸も町家も多く諸家様へも多く入込候由、……去る十三日……九つ時頃帰宅、江馬岩二郎は泊り番私老人在宿、然る処先達而同様に又々雨戸をはづし入込、江馬大小併木綿島の綿入壱つ、私大小併木綿綿入木綿羽おり鼻紙入紛失、七つ時過風に目を明き火を付し処、大ニ仕合、夫自御内へ参り御家中を相巡り候とも、様子相分り不申、江馬刀は大阪ニ而調への弐朱位の刀、御門内に落し之有候、紙入の内書物鍵類もさい布に入有之候、先達而盗と被存候。扨も不仕合弐度。此度は江馬も有之、何とも気の毒、人々に対し面皮も無之。直に引込と存候得共、先見合、直に此度ハ八丁堀へ御願申候。とうそ江馬分なりとも出れは宜敷と存候得共、再度の事故御家中之人々に面もくもなし。御上向も如何と存候故、相知れば届いて其節は御勝手方役丈ケハ御免願書相出し可申哉とも存じ候。……私の心中御察し可被下候……

と暮の十二月十三日山上登が報告している。就寝中に大小を盗まれたとあつては、武士道相立たぬ筈、「右の仕末何もかも混乱にて心も落つかず」と記すも当然である。所が茲には武士の魂を奪はれたと観念する程の理念的な緊迫は認められない。御役御免を願ふは重要書類を失つた政治的責任に対してのものに他ならない。武士道の維持を任務とする武士としての意味は、政治的責任者としての武士に全くおき変へられて了つているのである。之は大変動であると思はれる。

一方此等の人々に対して若い連中の生活は如何であつたか。英太郎は実に丹念に動静を父に報告しているその刻明さは感嘆に値するものがある。その中の一文に次の便りがある。

扨願上度儀は島之袷羽織一枚相拵度奉存候。尤私所持仕在候之は、母上様にも御存じの通り、甚簾物に而、一枚而己シカ外ニ無御座、御地ニ而毎御殺生御供等ニ相用候、此地ニ而は漸く入湯に相用ヒ候位ニ御座候。右故よき品ニ而一枚相拵度奉存候。尤島物にては私用而己に相用、余は不被相用候事故、一向黒のふくりんに而相拵置候はば可然やと奉存候。併し右品は余程高料にも有之、且は御時節柄如何敷とも奉存候へとも、是は御供之外主用並私用共に相用、且は丈夫之物故、一旦相拵置候はば損じ候事も無御座、却而徳用にも可有御座と奉存候。乍併余程高料之品故、矢張島物にて相拵置可申や、思召之程奉伺度奉存候。一躰ふくりん類は其御地之方余程下料にも御座候由、且又裁合せ物等に而下料之能キ品折々には持参り候事も可有御座、右様之品持来り候事も御座候へは、何卒御調被下候様仕度奉存候。乍併思召之程如何哉、御勘考之上奉願上度奉存候。黒ふくりんも唐之品は余程下料に而当来之由御座候へとも、右は暫之内に而赤色に相成、且は損しも早く口口承及申候。何れ相拵へ候には阿蘭陀之事と奉存候。何れにも宜御勘考之上奉願上候。思召之程も奉伺候。

兎角衣類向入用多には奉畏入候。且は襟或は袖口裏等早く損じ候には誠に以困果申候、冬迂も二度も有之事、又々先々の手当も仕度、誠に難渋に御座候。御推察之程奉願上候。

フラノの替ズボンが欲しい、ギヤバジンの合オーバが着たい青年の心理は何時の世も同じか、其にしても只管両親の指示を仰ぐ点が今日と異る。御思召の程如何と御伺はしているが欲しい一念は行間に躍動しているではないか。英太郎は衣類向一切を両親から支給せられ、其上小遣として月に二分程度を貰つていた。又必要に応じて五両の大金を一度に与へられたこともあつた。そして其等は尽く山上登を通じて与へられたものである。「弐分は小遣に請取、余は先月猪作取誘、無拠付合、是非無き次第に御座候。登殿も委細承知の上借用仕候。何れ登殿自も噂可有御座と奉存候。御推察願上候」と四両弐分を前借したりしていることを見れば弐分の小遣では充分では無かつた様である。よんどころ無い付合とは何であるか判りはせぬが、悠々と楽しんでいたと見られる。所で待望の羽織は如何なつたか、父の返事は勿論見当らぬが、

羽織事申上候処猶又被仰下候趣委細承知仕候当時は何れも高値且品も悪しく御座候由奉承知候尊君御所持之品被遣候思召にも被為在候得共日承に而者日数茂相過申候其内には時節も過候事故島物に而見計相求置可申旨奉畏候幸尾張や参り候に付早速申付置申候ゴロウ儀先に見合下値にも相成且は古物に而下料之品も御座候節と奉存候（三月二日付英太郎書翰）

とあるのを見れば、誠に残念至極の事であつたらしい。春に入つては今更羽織でもあるまい。父親は巧に冷却

期間をおいたわけである。然しこの父親としても都風の判らぬ程の田舎武士ではないので、嘗ては江戸に遊んだこともある人である。それは各地の本陣から寄せられた挨拶状を見ても確実である。敢て之を許さなかつたのは贅沢にすぎると見たのであろう。既に時代の差が現れている。時代は刻々崩壊に向つていたのである。

角左衛門は江戸に遊んだ際画家の南湖と親しく交游した。恰も南湖の八十才の賀筵も近いので、古の交りを温め度く常に英太郎に南湖を訪問する様に命じていたらしい。所が英太郎は何分相手は知名の士であり又老人であるので、仲々気が向かず、何かと理由をつけて引延している中に賀筵の期もすぎ、父の折角の志を無にして了つている。

南湖先生方も風邪に而長に延引仕、漸昨十六日参り申候処、折能御在宿故、罷通而会仕候。不相替御健に而、絵被致候。大御無沙汰且御伝言は一々申述候。賀筵之儀も承候処、最早四月頃被相済候趣故、私も大に驚、御門に而承り候は、末之趣と申述候処為知可申と存候へとも、遠方之儀故不及其儀相過候申、可然申上呉と被申聞候。賀筵之砌何れ被過拘参被遊思召之処は、最早相済、嘸御残念と奉存候。四月頃に而も私何之心も付不申罷在、無致方無之事御座候。私参りしを大に被悦、茶子菓子と大世話被致呉候へとも、不参付事故、咄も無之、且遠耳故、致方無之。又々参上可仕と申罷帰申候。云々（七月十七日付英太郎玉翰）

遠来の知友の子弟、茶よ菓子よともてなし度いのは老人の人情。話題は無し、其上耳が遠いとあつては逃け出し度くなるのも若人の人情。両々無理からぬ処である。処がこの南湖が春木南湖に相違なく、この一片の書牘によつて年次が天保八・九年であることを知り得た。

更に嬉しかつたことは何時の間にか筐底に雑つていた左の詩片の由来が図らずも判明したことであつた。

駿府西征　侯駕従　鵬橋客舎滕堪容　一酔知　君閑暇日　羣端写出百英蓉

右選山大夫一郷之駿陽　先師南湖画富士得妙

一郷遊其門故未句及之　不識軒

小大夫とは下山角左衛門であり南湖は云ふ迄もなし春木南湖である。角左衛門上京途次の雅会であろう。但し不識軒は誰かまだわからない。

（校友欄続き）

東住吉支部顧問座談会

二月二十一日（日曜日）午後一時より小泉氏宅にて開催。

明治四十一年卒の元老石原孫市氏を囲み、久井専務より「本学創立七十周年記念拡充資金募集」に関する趣意の説明の後、従来の校友会組織に対する批判並に校友会館設置、各支部の現況についての質疑応答等あり、午後五時和やかに散会した。

顧問各氏の寄附芳名は本誌に掲載、但し確定分のみ。

◎東住吉支部春季総会開催。三月末日の予定。

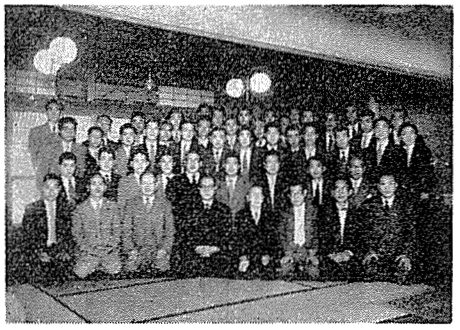
日時、場所確定次第会員に通知する。

出席者

本学側　久井専務理事、安井校友課長。

支部側（敬称略）

石原孫市、坪田吾一、中石清一、米田恒治、松井　剛、関矢貫一郎、深井敏雄、小泉博之、森　寿蔵。



東住吉支部総会（一品香ニテ）

堺支部有志懇談会

校友会堺支部では戦前多数の会員を擁し活潑な活動を続けていたが、幹部の大部分が応召し就中支部の連絡役を一手に引受けていた清香要太郎氏の戦死に因り、会合も一時中絶の已むなきに立至つていたが、今回旧に倍する活動を見んものと一部有志を以て左記の通り懇談会を開き久濶を叙すると共に大学からも久井専務理事、並に安井校友課長を迎え母校の近況と校友会活動の現状等を聴き盛会裡に散会した。

尚当日の会合はいはば支部再発足えの足踏みとでも云うべきものであつたが、全員の賛成に基き来る三月下旬又は四月初旬に在堺の校友全員を一堂に会し盛大な堺支部総会を開催することになつた。

記

一、とき　二月二十七日午后四時から
一、ところ　堺宿院　かき豊店
一、参会者

今井　恒雄　西田　昌弘　岡本　通
川島　清治　田淵　三郎　竹深喜代治
中塚　節男　町　四郎　藤木不二夫
小西　弘容　金正　良一　渋江　繁夫
中村源次郎　堀畑　軒一　藤木　操
井上　竹蔵　以上十六名。

尚堺支部では在堺校友を出来る限り多く支部会員として、加盟を求める為八方手を尽している が各人からも住所、勤務先等を左記に通知方を要望しているので本学報を読まれた方は、一応はがき又はその他の方法で左に通知を出される様にせられたい。

堺市大浜北町堀畑商工(株)内　堀畑軒一
堺市役所事業課内　藤木　操
堺労働基準監督署内　井上竹蔵

学内報

評議員互禮会

評議員互礼会は、年始交礼の為、一月十八日午后四時より天六学舎において開催。

当日は中務議長、白川理事長、岩崎学長の年頭の挨拶、久井専務理事より報告、七十周年記念拡充資金募集に当り評議員の諒解を求め協力を懇請した。出席者左の通り（いろは順）

岩崎　卯一　岩本　公夫　今井　康並
今西庄次郎　池田信之助　春原源太郎
林　信夫　丹羽　英夫　西尾専太郎
西村治三郎　西本　寛一　織田佐代治
大石雄一郎　大島　武夫　和田　豊二
桂　忠雄　神屋敷民蔵　樫本　信雄
吉田三七雄　高垣　善一　武田藤之助
竹沢喜代治　内藤　正剛　中谷　敬寿
中務　平吉　長柄　金吾　浪江　源治
村尾　静明　宇佐美正祐　矢野　文雄
矢口　家治　保井　剛一　松原　藤由
松尾　高一　政井　武　阿部　基吉
沢村　栄治　木原　繁実　木谷　宰三
三島　律夫　白川　朋吉　下条小野右衛門
下島　光　平井　三朗　久井　忠雄
森川　太郎　関　豊馬　角田好太郎
図師　親徳

中谷・植田両教授に法學博士號授與

法学部の中谷敬寿教授と植田重正教授とは、かねて本学法学部に論文を提出して博士号を請求していたが、昨年末の教授会でパスし、本年一月二十三日付を以て法学博士号が授与された。（略歴及び提出論文題名は別項参照）

なお博士号授与式は去る二月四日天六学舎理事会議室において行われ、本学役員出席の下に学長より両博士に学位記が授与された。

私大連盟關西支部懇談会

昭和二十九年二月十二日及十三日の両日に亘り関西大学において、私大連盟関西支部懇談会を開き次の議題についてそれぞれ検討をした。

イ、連合健康保険組合組織に関する件

ロ、昭和二十九年度大学卒業予定者の就職に関する推薦時期について協定を必要とする哉否や、若し必要ありとすればその時期は何時頃か

ハ、1学生の健康管理について
　2教員の政治活動禁止に関する学生の動きについて
　3関西における学生補導の近況

両日の出席校

愛知大学、大谷大学、大阪医科大学、大阪女子医科大学、関西学院大学、神戸女学院大学、高野山大学、久留米大学、南山大学、天理大学、立命館大学、龍谷大学、同志社大学、同志社女子大学、関西大学

人事異動

昭和廿九年一月廿三日付
法学博士の学位を授く
教授　中谷敬壽

昭和廿九年一月廿三日付
法学博士の学位を授く
教授　植田重正

法学博士
中谷　敬壽
（略歴）大正十四年京大法卒、同十五年立命館大学講師、昭和四年本学教授、法文学部長、法学部長歴任、同二十四年大学院兼務、同二十八年大学院部長同二十九年法学博士

（論文題名）
「法理觀變遷の史的研究」

（参考論文）
「増補法理学」、「日本憲法要義—公法法理の研究第一部憲法篇」
「日本行政法要義—公法法理の研究第二部行政篇」

法学博士
植田　重正
（略歴）昭和五年京大法卒、同九年本学講師、同十五年助教授、同十七年教授、法学部次長、法学部長歴任、同二十七年大学院兼務、同二十九年法学博士。

（論文題名）
「共犯の基本問題」、（参考論文）
「刑法要説」

學会出張

◇法学部中谷敬壽教授は東京の大学設置審議会に出張

◇岩崎卯一学長は東京の大学設置審議会私立大学連盟に出張

◇経済学部森川太郎教授は就職打合の為東京に出張

學会だより

關西大學英語英文學会例会

英語英文学会は学内活動の一端として一月廿日、例会英語英文学談話会を大学院に於て開催。

一、T・S・エリオットと現代宗教」　古志祐一

一、「Cockatrice に就いて」　広瀬捨三

なお世界唯一の英語学雑誌である"Anglica"五号を発行した。

關西大學經濟學会

経済学会では去る一月機関誌「関西大学経済論集」第三巻第四号、及び商学専攻会員の多数による「商学研究」（「関西大学経済論集」第三巻特集号）を発行した。

新博士の横顔

中谷博士を称う

桜田　誉

中谷先生が法学博士の栄誉を担はれたことは、最も深き師恩に浴する教え子の一人として此の上ない喜びを感じます又、三十年来を関大法学の発展に傾倒され校友も及ばぬ程に関大を愛し、校友学生と共に関大に生き、そしてその美しい紐帯の上に先生自身の学的成果の花を添えられたことは校友の一人としても亦、心からの祝意を捧げるものであります。そして茲に先生の学位を繰る二つの論文を思ひ到るまゝに記して先生の学徳を慕いたいと思ひます。先生が此の度提出された論文「法理観変遷の史的研究」は実は私の知る範囲では先生の最初の学位論文ではなく、二つ目のものであるといえませう。先生は法理学を本来的研究課題とされつつ、それとの関連において為された憲法学、行政法学が余りにもその方面に於て著名になられた為、その本来的なものが寧ろ一般の意識からすれば従たる存在になつていた様に思はれます。そして事実、戦前、戦時中を通じて集大成された論文は行政法学上のものでありましたから。それは日本行政法の独自的特色を示す神社法に関する研究であります。それは純法理的に詳密を極めたものであり、私の理解に於て誤りなければ、先生の学位論文にふさわしいものであつたと思われます。私が学究の道へ踏み入る一つの動因に、先生が此の論文を学位論文として整理されることを手傳わせて頂こうとしたことがあるのをみても窺えると思います。そして占領軍管理下に於て神社法が廃止されて現行行政法上から姿を消したとしても、その先生の研究が、日本法制史上、尚重要な価値を失うものでなく、学位論文としても立派な存在であらうことを、潜越乍ら今も信じて疑いません。然し、先生はそれにかゝはらず矢張先生の本来的研究課題たる法理学の分野に於てその碩学の名にふさわしい成果を問はれたのであります。今にして始めて先生の真意を計り知り得たのであり、先生の貫徹した学問的態度は教える所極めて多く、その喜びと共に深い謝意を禁じ得ないのであります。激しい情熱を内に湛えつゝ、淡々として学問的使命に精進される先生の姿を、何時までも千里山上に求めたいものであります。

先生の御研鑽を称え、御健康を祈る次第であります。

（法学部教授）

学究としての植田先生

中　義　勝

植田先生がこのたび法学博士の学位を享けられたのを機会に、茲に先生についての日頃の感懐の一端を披瀝し得ることを、先づ何よりもの喜びとしたい。

さて私はみづから省みて、固よりドイツの刑法学説に精通しているとみづからを許し得るものではなく、従つてまた、その共犯論上の諸見解について学び得たところも遺漏なきを保し得ざるものと自評せぬわけには参らぬのであるが、しかもかく寡聞にして敢て言ふことを許されるならば、先生のテイーテルアルバイト「共犯の基本問題」は、さしも犀利を誇るドイツ刑法学説にも、曾てこれほど仔細に諸概念を分析し、共犯論上随所にみられる対立的見解に明白な体系的地位を興へ、不可疑的とまで迷信されている傳承的命題を果断に然し慎重に抹殺し、以て「犯罪論上の暗黒点—共犯論」に体系的光明を投げかけた例はこれをみざる底のものである、といつてはばからぬのである。我々は本書によつて、我が国の刑法学、とりわけ共犯論の水準をドイツに対しても誇示し得るものと考へて、決して不可はないのである。

ところで、本書は固より、およそ先生の手に成る著書・論文を読む者は、読みの進みて先生一家の見に接する時、常に「素直にみる時は」とか「虚心に考へる時には」といふ如き語句が用ひられてゐるのに気付いてゐることかと思ふ。或ひはかく指摘されて成程とうなづかれるむきも多からうと察せられる。これは一見、些細な語句の端を捉へて物言ふに似て、その実、極めて重大な点に触れるものであり、先生の学風の骨子もかつてこの点に存すると考へられるのである。それといふのは、先生一旦問題と当面されるや、あらゆる学派的偏見を退けられ、既成の概念の公式的適用を排せられて、ひたすらに事柄そのものに含まれてゐる事理を虚心に直視され、おのれをむなしくすることにより却つて最も強力に「借りものでない」自説を打ち立てられてゐる綴な分析と、これを越える独創的見解を獲ち得られたのも、さこそとうなづかれるわけである。

かくして先生は、近道を知らぬ愚考であり、一歩の感覚をそのあしうらにたしかめなければ今一歩を進め得ざる憶病者であると申し上げてよいであらうか。ドン・キホーテは一介の愚者である。然し彼は高貴なる愚者である」。いみじくもラードブルックはかく嘆嘆した。先生は既成の学説を、その成立の根源にまで遡るのでなければこれを取捨し得ぬ愚鈍者であり、誰よりも真理の厳粛性を畏れられる憶病者である、と私はかやうに申し上げぬわけには参らぬのである。

（法学部専任講師）

ハーヴァード・ロー・レビュー

―ハーヴァード大学法学部の好意に応えて―

春原源太郎

ハーヴァード大学と本学と図書の交換を約束してから約二年、同大学の「ローレビュー」と本学の「法学論集」とは互に幾度か大平洋を越した。

私はこゝで改めてハーヴァード大学法学図書館の M. A. Moody 氏並に同大学の好意に深い感謝の意をこめたお礼の言葉を述べたい。本学にはかつて同大学に学んだ人々もあり、古くからロー・レビューも本学図書の一部であつた。しかしバックナンバーを揃えるといふことは決して容易なことではない。

こゝで Moody 氏の

「ハーヴァード・ロー・レヴューの一揃を完備するよう努力する」

という好意ある言葉を本学々報に紹介して謝辞にかえ、創刊号（**一八八七年刊**）から全部揃つて本学図書館にかざられる日を待つている。

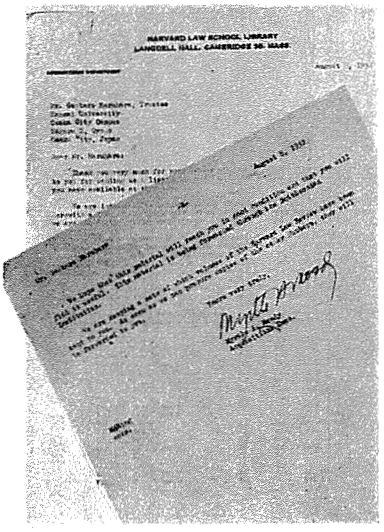
そのことは、アメリカ法学に記念されるラングデル・ホールの Harvard Law School Library と本学図書館を結ぶということだけでなく、ハーヴァード法学と関大法学とが法学の進歩に寄与することであると考へる。

ハーヴァード・ロー・レビューを手にして回顧することは Clerk Student といわれたアメリカ法学の進歩にハーヴァード法学の果した役割の大きかつたことである。かつて高柳賢三氏が「新法学の基調」のなかで「一八八〇年代にハーヴァード大学から一大天才が現れて米国の法学教育に革命を起した。一大天才とは即ちラングデル教授その人である。彼の主張は要するに二点に帰着する。第一法学は Science である。第二法学の材料は Printed Material にある。即ち判例中に存すると云うにある」と、また「ハーヴァード・ロー・スクールは三拍子揃つて居る。即ち教授には米国一流の大家が集まつてるし、学生は米国青年の粋を揃えて居る。又図書館の完備せる点は他にその比を見ざる処である」と、かくてハーヴァード法学は Thayer. Keener. Ames. Wilhiston. Wigmore. Pound 等その名がわれわれにも親しまれた学者によつて基礎が築かれた。

私は Association of American Law Schools の最近の "Journal of Legal Education" にハーヴァード大学現法学部長 E. N. Griswold 博士が、シカゴ大学法学部の五十周年記念講演 "Future of Legal Education" の紹介を別に書いた（私大連盟会報第七号参照）が、博士が記念講演にふさわしく、冒頭ワシントンの街に有名な "All that's past is prologue" を引用されたことを想い返す。

アメリカ法学における Case Method は今や反省されつゝあるようで、これに相対するものであるかの如く Problem Method などが唱へられるに至つた。このことは博士もアメリカ法学教育の将来を展望するに当つて判例の増加による学説の重要性を力説しておられるところで、法学のみならず凡ゆる学問における絶えざる変化と発展は大学の使命でもありハーヴァード法学の将来に期待されるところも大きいであろう。

本学が、法学教育を目的として創設された歴史を省みつゝ、本学教授の論著は遠くハーヴァード大学のロー・スクール・ライブラリーに迎へられ、ロー・レビューは本学図書館に入り、共に法学の発達に寄与するであろう。（理事）



カリフォルニア大學寄贈圖書

去る昭和二十七年十月以来本学はカリフォルニア大学（アメリカ）と図書の交換を行つているが、この程左記の図書が寄贈されて来た。

LIST OF UNIVERSITY OF CALIFORNIA PUBLICATIONS, offered by University of California General Library

MODERN PHILOLOGY:

Clair H. Bell: The Meistersingerschule at Memmingen and its "Kurtze Entwerffung", 1952.

Marianne Bonwit: Der Leidende Dritte, 1952.

Charles E. Borden: The Original Model for Lessing's "Der Junge Gelehrte", 1952.

Arthur G. Brodeur: The Meaning of Snorri's Categories, 1952.

F. Andrew Brown: On Education: John Locke, Christian Wolff, and the "Moral Weeklies", 1952.

Edmund K. Heller: Ludwig Hohenwang's "Von der Ritterschaft", 1952.

Andrew O. Jaszi: Rilkes Duineser Elegien und die Einsamkeit, 1952.

C. Grant Loomis: The German Theater in San Francisco 1861-1864, 1952.

Joseph Milecki: Hermun Hesse's "Glasperlenspiel", 1952.

ECONOMICS:

Warrenc. C.Scoville: Capitalism and French Glassmaking, 1640-1789, 1950.

（以下次号）

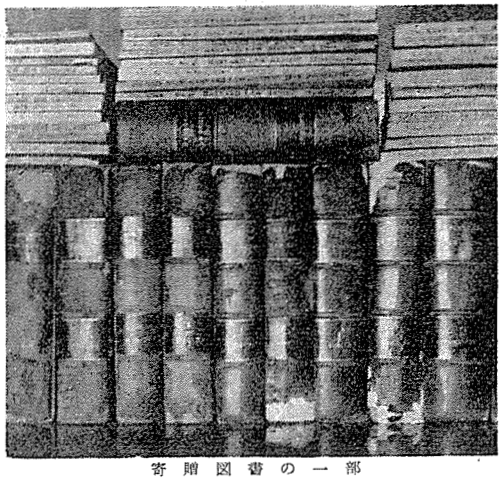
LIST OF THE HARVARD LAW REVIEW

offered through the courtesy of

HARVARD UNIVERSITY LAW SCHOOL LIBRARY

HARVARD LAW REVIEW:

Vol. 1, Nos. 2, 3, 7 (1887)
Vol. 2 bound (1888)
Vol. 3, Nos. 1, 3, 4, 5, 6, 8 (1889)
Vol. 4 bound
Vol. 5 bound
Vol. 6 bound
Vol. 7 bound
Vol. 8 bound
Vol. 9 bound
Vol. 10 bound
Vol. 11 bound
Vol. 12 bound
Vol. 13 bound
Vol. 14 bound
Vol. 15 bound
Vol. 16 bound
Vol. 17 bound
Vol. 18 bound (1905)
Vol. 19 bound
Vol. 20, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 21 bound
Vol. 22 bound
Vol. 23 bound
Vol. 24, Nos. 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8 (1910)
Vol. 25 bound
Vol. 26, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 27 bound & No. 4
Vol. 28, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 29, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 30, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 31, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 32, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 33, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 34, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 35, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 36, Nos. 1, 2, 6
Vol. 37, Nos. 6, 7, 8



寄贈図書の一部

Vol. 38, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8 (1924)
Vol. 39, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 40, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 41, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 42, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 43, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 44, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 45, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 46, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 47, Nos. 1, 2, 3, 5, 6, 7, 8
Vol. 48, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 49, Nos. 1, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 50, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 51, Nos. 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 52, Nos. 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 53, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 7, 8
Vol. 54, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8 (1940)
Vol. 55, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 56, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 8
Vol. 57, Nos. 1, 2
Vol. 58, Nos. 8
Vol. 59, Nos. 1, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 60, Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 61, Nos. 2, 4, 6, 7, 8
Vol. 62, Nos. 1, 3, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 63, Nos. 1, 2, 4, 5, 6, 7, 8
Vol. 64, Nos. 1, 2, 3, 6, 7, 8 (1950)
Vol. 65, Nos. 1, 6, 7, 8
Vol. 66, No. 1

and Index of Editors, 1-50; Index Digest to Vols. 1-17; Table of Cases to Vols. 1-15.

最終のコースに入つた学生は本年度最後の試験に懸命の努力を傾け準備に忙殺されている。今、此のシーズン中の体育各部の動きを振り返つてみよう。

サツカー部 関西学生サツカーに宿敵関学を破つて、四年振りに関西学生の王座に登つた本学は、関東学生サツカー本年の覇者、立教大を一月十三日西宮グランドに迎え、全日本の王座を賭けて戦い、両軍少し固くなり日頃の華麗さを見ることが出来なかつたが、本学は終始積極的に試合を進め、殆んど、立教大陣内で戦ふと云ふ圧倒的強さで本年度の覇権を獲得した。

当日のスコアーは

一月十三日
関大 3（1 2 0 0）0 立教大 於西宮

アイス・スケート部 第二回、関西学生氷上選手権第一日は一月十四日大阪スケート・リンクでホッケー、スピード、フィギュアー、三種目の参加選手、参加のもとに入場式が行はれ大会の幕が切つて落された。本学はアイスホッケーの部で優勝候補随一の同大を大接戦の末破り宿願を達した。戦績は次の通りである。

一月十四日 関大 24（7 9 8 0 0 0）0 京大 於大阪スケートリンク
一月十八日 準決勝 関大 30（8 14 8 2 0 0）2 立命大 於大阪スケートリンク
一月二十二日 決勝 関大 7（2 1 4 0 2 3）5 同大 於大阪スケートリンク

スキー部 全日本学生スキー選手権は一月十二日、北海道小樽で開幕、本学は昨年より強力なメンバーを揃え大いに健闘したが、総合成績、一部で総得点8で六位となつた。

成績は次の通りであつた。

耐久	3位	後藤	2時間41分50秒
長距離	4位	後藤	1時間20分10秒
〃	6位	阿部	1時間20分47秒

陸上部 第十五回、関西学生駅傳は神戸駅—平安神宮間約八四キロコースで十二校参加のもとに熱戦が繰り展げられたが、本学より出場選手は前半優勢のうちにリードしたが、選手の故障者が出て、立命に敗れ連続2年二位に甘んじた。

当日記録は次の通りである。

1位	立命大	4時間44分05秒	（大会新）
2位	関大	4時間46分40秒	（大会新）

図書委員会 先月から図書委員が編集する図書館報が発行されているが、此の小冊子が図書館と云ふ一つの角度から、それを中心としてその周囲で活躍している学生が、本学教授の投稿を受け又学生の研究発表をしているのは新らしい動向として歓迎されなければならない。

放送部 関西学生放送連盟がABC放送の援助を得て毎週土曜日学園放送として送つている学園グラフも既に、第二〇頁を迎え、本学の担当は二月十三日土曜日午後四時より四・一五時の間に放送した。学生放送も愈々第二年度に入いるが今後の活躍が期待されている。

映画研究部に撮影機購入

映画研究部と学生課とが中心となつて理事会に要望していた撮影機がこのほど購入された。米国製優秀機械で、今後は大学の行事など記録として撮影されることとならう。また映画研究部では新しい本学の映画製作を企画している。

昭和二十八年度 全國大學卒業豫定者就職見込

昨年十一月十五日現在で文部省大学学術局学生課の発表によると、私立大学の卒業予定者総数は三一、一三九名で、その中就職を希望する者は七七%あり、就職の決定した者はその中二五%である。これを国立の就職希望率八六%、決定率二六%と較べると、就職決定率は私立の方が遙かによいことになる。これは女子の場合において殊に甚しい例えば就職決定率が私立一二%であるのに、国立五%となつている。また夜間部(大部分私立)では、卒業予定者総数一三、三〇四名で就職希望者はその三二%を占め、決定率は一七%となつている。

次に学部別（全国国公私立含めて）では、法・経・商関係学部卒業予定者数二七、〇八二名中就職希望者は八一%、就職率三三%で、文科系統学部卒業予定者数七、三二四名中就職希望者は七一%、就職率一八%となつている。女子の場合も大体男子と同じ比率を示している。

さらに進学希望者数は、国立八%、公立五・一%、私立四・七%となつており学部別にみても大体この比率を保つている。進学希望で高率を示しているのは短期大学（昼夜とも）卒業生で、これは短期大学がターミナル・エデュケーションの性格をもつているためであろう。

（編集室）

校友

常議員会

常議員会は一月二十八日午後六時より会長、副会長列席のもとに校友課附属室にて開催、左記事項を附議し、夫れ夫れ可決した。

一、会則改正の件
二、バッヂ制定並に製作の件
三、支部承認の件

推薦校友の紹介

学校法人関西大学寄附行為第九章第卅五条第二号により、左記五氏が推薦校友となつた。

昭和廿八年十月十五日附

松井　剛（経済学部）
株式会社三協製作所社長　日赤奉仕団田辺連合団長
本籍　大阪府南河内郡千早村春日
現住所　大阪市東住吉区山坂町一の六三
推薦　東住吉支部

昭和廿九年二月十八日附

宗行源治（専門部）
兵庫県会議員
本籍　兵庫県飾磨郡豊谷村前之庄
現住所　右同所
推薦　神戸支部・兵庫県庁秀麗会

二月二十五日附

松田唯一（専門部）
西宮市助役
本籍　愛媛県新居浜市二三三
現住所　西宮市川添町四二の二
推薦　西宮支部・西宮市役所関大会

長田義一（関甲）
大阪市会議員
本籍　大阪市城東区新喜多町四の五六
現住所　大阪市城東区放出町一二五二
推薦　大阪支部・関甲倶楽部

豊岡正芳（関西法律）
池田市会議員
本籍　池田市栄町一丁目七三四
現住所　池田市栄町一丁目七三四
推薦　池田支部・関大三七会

大阪支部

大阪支部幹事選任に就ては、去年十一月二十七日の秋季総会の決議に従い、一月二十三日午後二時より、北浜二丁目樫本法律事務所に於て支部長、副支部長四名会合の上、左記諸氏を新幹事に選任した。

支部長　中務平吉
副支部長　大石雄一郎　大月伸　樫本信雄

幹事

阿部甚吉　今井康兼　梅原貞次郎
大島武夫　織田佐代治　寒川喜一
鎌田嘉之　神屋敷民蔵　桂忠雄
加藤昌秀　北原元茂　木谷宰三
楠武城　坂本龍夫　下条小野右衛門
竹沢喜代治　多賀谷宏　田中一郎
寺西武　徳久俊治　徳井悦郎
長柄金吾　丹羽英夫　春原源太郎
松本芳太郎　町四郎　三島律夫
村上精三　八木万太郎　矢野文雄
横田長次郎

二月六日午後二時より校友課附属室にて大阪支部幹事懇談会を開催、初顔合せをした。

二月二十日午後三時より校友課附属室にて、幹事会開催、母校七十周年拡充資金募集に就て協議した。出席者十七名

久井専務理事　安井校友課長
中務平吉　大石雄一郎　大月伸
樫本信雄　阿部甚吉　今井康兼
坂本龍夫　多賀谷宏　下条小野右衛門
八木万太郎　矢野文雄　横田長次郎
織田佐代治　神屋敷民蔵　北原元茂
長柄金吾　松本芳太郎

神戸関大倶楽部役員会

神戸関大倶楽部では二月九日午後六時より、新装成れる神戸公証人合同役場（山崎理事長宅）に於て昨年十二月五日の総会にて選任された新役員の初顔合せを兼ねて、母校創立七十周年記念拡充資金募集の方法に就て協議懇談会を開催。

大学よりは安井校友課長出席、現在の募金状況の説明及質疑応答があつて倶楽部の募金活動に対する指針に就て得る処があつた。

当日態々列席願つた神戸地検検事正安井栄三氏の提案で、岩崎先生の学長再御就任の歓迎祝賀会を神戸関大倶楽部の有志で催すことゝし、午後十一時散会。

当日の出席者は次の通り（敬称略、順序不同）

母校より　安井校友課長
倶楽部側より
安井栄三　山崎敬義　山本春治
角田好太郎　難波方　同井裕発
岡田退一　橋本太一　水本千代松
斉藤国臣　以上

昭七会

昭七会総会は去る一月二十六日「いろは」で開催、母校より岩崎学長、森川理事を迎え、大学の現状及び将来について活潑な意見を交換し、また創立七十周年記念寄附募集にも積極的に協力することを申し合せ、盛会裡に散会した。

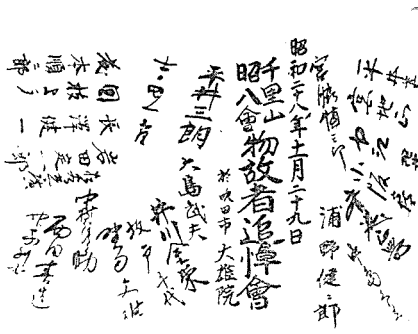
当日の出席者二十八人、左の通り

昭七会

稲垣治　井本拙夫　越智比古市　日下五一　京本善英　小泉博　沢田秀雄　沢山勝　高橋政一　武田太七　春原源太郎　久克巳　福原克巳　藤原忠義　前田滝造　町田種三　丸山喜三造　行俊喬
米田恒治　飯盛秀心　竹内幸一郎　辻太作　戸根泰雄　永田菊次郎　山下邦宣　谷口奈良男　中村正憲　加古撤次郎

昭八会物故者追悼会

昨冬十一月二十九日午前十時半より吹田市大雄院にて昭八会物故者追悼会を執行。当日は晴天には惠まれたものの生憎くと関西私鉄ストに祟されて参列者は半減して了つた、それでも二十数名の者が相集つて今は亡き三十二名の学友達の霊を慰め冥福を祈ることが出来た。当日の導師は曾ての学友である小阪禪師が主導してくれ在天の諸霊も嘸かし喜んでくれたことゝ思ふ、大雄院の表門には「関西大学昭八会物故者慰霊祭式場」の大文字を掲げ賽路には塵も留めずよく清められ境内寂として声なく秋天高く一乃二乃の片雲が動くのみであつた。祭壇には三十二名学友の写真を安置し、学友有志より数々の供物が供えられた。午前十一時より宮脇君司会の下に追悼会を執り行つた。



昭八会寄せ書

先づ平井君開会の挨拶を述べ、小阪導師入場して読経、次で長沢君昭八会を代表して弔辞を朗読した。惻々人に迫る心情を吐露した追悼の辞には遺族も並居る学友達も眼頭の熱するを覚え、中江君より弔電と本日欠席の遺家族より寄せられたる近況を披露し、これ亦戦前戦後の激変に不幸の波の用捨なさに涙をそそられた、時は移り焼香となる、列席遺族の老いたる国技母堂、坂戸、中島両未亡人、痛々しげな遺児井川金栄君の姿にはまたしても涙を誘われた、全員焼香を終り十二時二十分平井君閉会の辞を述べ今後昭八会としては力の及ぶ限り御遺族のお役に立ちたき旨を誓い当日の追悼会を滞りなく終了した。

当日弔電を寄せられた人々

松野幸吉（東京）　竹若隆三（東京）
阿部正貫（九州）　竹歳辰造（大阪）

当日の参列者

遺族　国枝よう　坂戸千代　中島くり子　井川金栄

恩師　中村良之助先生

学友　西田春造　藤本順二郎　長沢健一　中家利国　岩田定一郎　斉藤正興　大島武夫　浦野健二郎　野田文雄　小阪喜一　松谷光広　宮地正一　平井孝道　宮脇慎三郎　中江巽　吉田一郎　平井三朗

千里山昭八会

昨年九月二十八日午後五時半より大阪駅日本食堂特別室に於て第二十一回例会を開催、今回は昭八会物故者追悼会の件で協議懇談をなす。

追悼会を十一月二十九日午前十時より吹田市宮前大雄院に於て執行することを決定し、更に当日の執行委員を夫々任命し準備を進めることを申合せた。

当日の出席者

浦野健二郎　中利　家国　長沢　健一
大島　武夫　斉藤　正興　一瀬　義次
木下　忠夫　多賀　恒一　吉田　一郎
宮脇慎三郎　中江　巽　平井　三朗

同十月二十九日午後五時半より大阪駅日本食堂特別室に於て第二十二回例会を開催、幹事より物故者追悼会準備の進行状況を報告。

当日の出席者

中家　利国　竹歳　辰造　斉藤　正興
吉田　一郎　宮脇慎三郎　大島　武夫
浦野健二郎　結城　内太　野田　文雄
美吉克之祐　広瀬　義臣　中江　巽
松谷　光広　藤本順二郎　平井　三朗

同十一月二十九日午後一時より物故者追悼会に引続き第二十三回例会を開催、幹事より本日の物故者追悼会を以て昭八会二十周年記念行事も一応完了したる旨を報告し年余に亘る協力と援助に対し深甚の謝意を表し、更に二十周年記念行事は茲に終つたが次の目標である二十五周年記念に向つて前進するため昭八会一層の團結と強化を期し母校関大のために熱意と誠意を以て余力を捧げられんことを切望した。

当日の出席者

中村良之助　西田　春造　藤本順二郎
長沢　健一　岩田定一郎　中家　利国
大島　武夫　野田　文雄　斉藤　正興
吉田　一郎　浦野健二郎　小阪　喜一
松谷　光広　宮脇慎三郎　平井　孝道
宮地　正一　中江　巽　平井　三朗

朝日生命千里山会結成

職場の校友会として、此度朝日生命保険会社千里山会を結成、その発会式を二月十日午後六時半よりアベノ富士屋で盛大に挙行。同社には他大学の赤門会、三田会等既に出来ていたのに対し、関西の雄関西大学は未だ結成されていなかつたものを、今回漸く発足するに至つたのである。

出席者一同の中には、初めて顔を合す人もあつたが、規約の結成、名も千里山会に一同賛成、会長には昭六卒の鳴尾芳太郎大阪月払営業部長（昭六卒）、顧問は田中俊一南支社内務副長（昭六卒）、幹事一名決定した。

出席者

鳴尾芳太郎（昭六　法卒）
田中　俊一（昭六　法卒）
広田　憲信（昭八　法卒）
飯田　潔（昭二七　商卒）
田中　勉（昭二五　法卒）
吉村　（昭二五　経卒）
寺西　三郎（昭二七　法卒）

（五頁中段へ続く）

關西大學擴充資金募集要項

一、予定金額　金五千万円
一、一口　金壹千円以上
一、御送金は銀行振込用紙を以て全国の左記関西大学取引銀行本・支店へ、或は振替貯金（大阪壹貳八七五番）又は御便利な方法で関西大学会計課宛御願い致します。
神戸銀行梅田支店・三和銀行天六支店・住友銀行天六支店・住友信託銀行本店
泉州銀行大阪支店・第一銀行梅田支店・大和銀行天六支店・帝国銀行天六支店
・日本勧業銀行梅田支店・安田信託銀行大阪支店（送金先銀行五十音順）
一、〆切期日は一応**昭和二十九年十月七日**と予定致します。
一、寄附者の氏名は、関西大学学報誌上に順次発表致します。

關西大學擴充資金募集は大藏大臣の承認した指定寄附金であります

今回大蔵大臣より左記写の通り、本学拡充資金募集の寄附金について、法人税法第九条第三項但書の規定に該当する寄附金としての承認を受けました。普通の寄附金であると、法人税法第九条第三項本文によつて、法定限度を超過した場合、その超過額はその法人の損金に算入されないから、法人所得に加算の上、課税を受けることになるのですが、本学の募集する寄附金は法人税法第九条第三項但書の「指定寄附金」の承認を受けているので、寄附者である会社その他の法人は、その寄附金については金額の如何に拘らず、これを損金として認められますから税金の対象にはならないのです。この指定寄附金は昭和二十五年大蔵省告示第五一〇号第三号昭和二十六年大蔵省告示第五五二号に該当するもので左の通りになつています。

「学校教育法第一条に規定する大学、高等学校、中学校又は小学校の敷地、校舎その他附属設備を施設する為に学校法人又は民法による財團法人に対してなす寄附でこれ等の法人が寄附金の募集について大藏大臣の承認を受けた日から一年以内に支出されたもの、金額」

近頃各種の寄附金募集が多いのですが、折角好意ある御寄附をした会社はこれを損金として経理処理しているのを、税務署では損金否認して利益加算し課税を受ける例は多いのですが、本学のは前述の如く大蔵大臣の承認した「指定寄附金」でありますから、損金を否認される心配はありません。何うぞこの点、特に御理解を賜りとう存じます。

（寫）
藏税第一八五〇号
昭和二十八年十月八日
学校法人　関西大学
理事長　白川明吉殿
大蔵大臣　小笠原三九郎

昭和二十八年九月二十二日附で願出があつた寄附金については法人税法第九条第三項但書の規定に該当する寄附金として承認する。

寄附募集について

久井忠雄（専務理事）

質問

一、学校から直接本人宛に寄附依頼書が送られているのに支部、職域会、同期生会其他からも寄附勧誘を受けるがその関係は如何様になつているのか。
二、芳名録は場合により記入の重復、例えば同期生として且職域校友として又は校友会支部所属員として重復する場合があると思うが如何。
三、芳名録に記入した金額に対する集金者は其の会の責任者に於て義務付けられるか。
四、寄附の勧誘又は集金に当つて交通費集会費等の実費が必要である、いかがするか。
五、集金する場合、身分証明書が必要ではないか。
六、寄附金は一ケ年内に收めなければならぬか。
七、法人以外の免税は不可能か。
八、寄附金は校友のみに限るか。

答

一、今回の寄附依頼は校友個人、職域会同期生会、校友会支部、評議員等校友の凡ゆる層、凡ゆる関係に呼びかけ母校愛の受取りにもれのない様にして居りますので重復している事は御了承願います。従つて支部、同期生会等あなたの御関係先のあらゆる所から勧誘が参ります故、うるさいと思わず勧誘者の熱意を御くみとり願います。但し寄附金の実納金額は重復して戴く事はありません。
二、各芳名録に同一金額を記入戴いても差支ありません。但し其旨を附記願います。
三、義務と云う事は絶対ありませんが其の今としても有終の美を飾る為、出来る限り一括御集金の御盡力を願い、尚未納の方には学校側としても関係方面と連絡の上、御集金させて戴きます。
四、その実費は実收寄附金額の一割以内であれば学校側に於て負担させて戴きます。
五、御申出の向には身分証明書を発行致します。
六、出来る限りそうして戴きたいと存じますが多額に集める必要上又止むを得ない場合は昭和卅年の十月迄でも結構です。只法人の免税は昭和廿九年十月七日で御座いますから為念。
七、許可は法人のみですが個人の場合、所得税の申告の際、必要経費の中に含めて戴いて税務署と御交渉願つてはと存じます。
八、限りません。出来れば教育に関心の深い篤志家又は貴台と関係の深い校友の外友人等御勧誘願へればと存じます

感謝録

別項記載の通り、母校創立七十周年記念拡充資金寄附を募集致しました処、その趣旨に御賛同下さいまして陸続左記の通り御寄附をいたゞきました。三月二十日迄に拝受しました御寄附者の芳名を爰に録し、謹んで感謝の意を表します

昭和二十九年三月

学校法人　關西大學

關西大學七十周年記念
拡充資金寄附者芳名（三）

昭和二十九年三月二十日現在（順序不同、敬称略）

金四百萬円也　竹中工務店（才一、二回合計額）

金壹百萬円也　匿名氏

金壹封　岸田幸雄（兵庫県知事）神戸支部扱

金五拾五萬円也　昭六会

内訳（才一・二回合計額）

金拾八万円也　久井忠雄（評議員）
金五万円也　堀畑軒一
金弐万円也　長尾昇
金弐万円也　嘉根勘治
金弐万円也　齋藤善三
金壱万円也　鳴尾芳太郎
金壱万円也　白川惠宜
金壱万円也　佐伯三郎
金壱万円也　吉田伴嗣
金壱万円也　楠井文雄
金壱万円也　神木彦次郎
金壱万円也　有賀司郎
金壱万円也　藤井兵藏
金壱万円也　今井憲夫
金壱万円也　三谷久男
金壱万円也　岡部俊吉
金壱万円也　福原菊次郎
金壱万円也　門田文三
金壱万円也　浅本俊一
金壱万円也　喜多由造
金壱万円也　朝倉茂直
金壱万円也　川上末一
金壱万円也　中村武一郎
金壱万円也　中谷勝
金壱万円也　吉川敬一
金壱万円也　上野俊彦
金壱万円也　日下康夫
金壱万円也　羽生忠
金五千円也　羽淵博
金五千円也　川越智
金五千円也　中辻淳
金五千円也　青野昌平
金五千円也　奥川武郎
金五千円也　矢寺三郎

金五拾萬円也　歌舞伎寿司

金四拾五萬円也　大阪城口研究所（才一、二回合計額）

金參拾八萬五千円也　十期会

内訳（才一、二、三回合計額）

金七万円也　矢野文雄（評議員）
金壱万円也　河合中
金壱万円也　北川喜八郎
金壱万円也　森柊次
金壱万円也　中山厳
金壱万円也　千原清治
金五千円也　荻野武男
金五千円也　糸田川信勝
金五千円也　百柳丈太郎
金五千円也　戸田清一
金五千円也　萱島栄

金貳拾參萬七千円也　神戸支部

内訳（才一、二回合計額）

金壹封　岸田幸雄（兵庫県知事）
金五万円也　兵庫県庁秀麗会
金參万円也　原田鹿太郎（評議員 明43専法）
金參万円也　山崎敬義（評議員 神戸支部長 大14大法）
金壹万円也　難波方
金壹万円也　橋本太一（昭2専経）
金壹万円也　水本信夫（大7専法）
金壹万円也　森又雄（推薦）
金壹万円也　土井義弘（大15大法）
金壹万円也　東耕龍男（昭4大法）
金五千円也　岡田退一（昭9大法）
金五千円也　山本春治（昭14専二法）
金五千円也　水本千代松（大14専二経）
金参千円也　尾形旨正（昭21大経）
金参千円也　片山勝（昭21大経）
金参千円也　木内博（昭22大経）
金参千円也　中藤幸太郎（昭10大法）
金参千円也　西光健次（昭17大経）
金弐千円也　田中鉞愷（昭18専一法）
金弐千円也　渡辺道男（昭21大法）
金弐千円也　赤刎正夫（昭26学二法）
金弐千円也　片山菊治郎（昭5専法）
金弐千円也　宮信重夫（昭9専二法）
金弐千円也　吉田貞澄（昭5専国）
金弐千円也　朱相奎（北京楼 篤志家）
金弐千円也　黒田一男（篤志家）
金壱千円也　高原博（昭26学二法）
金壱千円也　野田俊春（昭27学一法）
金壱千円也　小林弘（昭9専一商）
金壱千円也　泓川義文（篤志家）
金壱千円也　氏林清（昭15大法）
金壱千円也　田村光嘉（昭13大法）
金壱千円也　小川立朝（昭15大経）
金壱千円也　鳥居親之（篤志家）
金壱千円也　林義夫（昭11大法）
金壱千円也　大野幸雄（昭10大政）
金壱千円也　松岡行雄（大15専経）
金壱千円也　高橋猪久次（大4大法）
金壱千円也　島村猪之助（昭3専経）
金壱千円也　山本鎭郎（昭10専二法）
金壱千円也　貴答喜作（昭7大法）
金壱千円也　赤井定雄（昭11大法）
金壱千円也　塚本勝（昭13大法）
金壱千円也　大森松太郎（篤志家）

金壱千円也　中辻　卯吉（篤志家）
金壱千円也　中江　秀実（篤志家）
金壱千円也　榎本　昭（篤志家）
金拾萬円也　三好　万次（校友会副会長 大4専法）
金拾萬円也　石原勝太郎（在学生父兄）
金拾萬円也　万年社
金拾萬円也　泉州銀行
金八萬円也　校友会東住吉支部

内訳（才一回分）

金参万円也　関矢貫一郎（昭13大 支部長 政）
金弐万円也　米田　恒二（昭7大 法）
金壱万円也　松井　剛（推薦）
金壱万円也　中石　清一（昭5大 法）
金五千円也　石原　孫市（明41専 法）
金五千円也　坪田　吾一（大15大 商）
金七萬円也　株式会社　ナニワ印刷所
金六萬円也　四三会

内訳（第一回分）

金参万円也　原田鹿太郎（評議員）
金弐万円也　下条小野右衛門（評議員）
金壱万円也　滝川　堯
金五萬円也　樫本　信雄（評議員会副議長昭3大法）
金五萬円也　内田　蕊（昭2大商）
金五萬円也　日本機材工業株式会社
金五萬円也　長柄　金吾（評議員 校友会副会長 昭12大 経）
金五萬円也　中務　平吉（評議員会議長 大阪支部長 推薦校友）
金五萬円也　吉川　浅吉（在学生父兄）
金参萬円也　水谷　揆一（関西大学講師）
金参萬円也　匿名氏
金参萬円也　日本家具製造株式会社
金貳萬円也　田中　藤作（大10専法）
金貳萬円也　佐々木豊写真館
金貳萬円也　富山　俊夫（在学生父兄）
金貳萬円也　牧野　武三（在学生父兄）
金貳萬円也　東田　繁雄（在学生父兄）
金壹万円也　平田奈良太郎（在学生父兄）
金壹万円也　山本　宗治（在学生父兄）
金壹万円也　奥沢　澄（鳥取支部長 昭8大 経）
金壹万円也　乾　義雄（大6専 法）
金壹万円也　郡　彪（昭28専 法）
金壹万円也　平井　孝道（昭8大 哲）
金壹万円也　伸村　正雄（昭11大 法）
金壹万円也　株式会社　日水工業所
金壹万円也　白井　利久（在学生父兄）
金五千円也　藤高　豊作（明37 法）
金五千円也　毛利　敬正（在学生父兄）
金五千円也　服部　正夫（昭19大 法）
金五千円也　新井忠二郎（昭19大 法）
金五千円也　大谷　松次（昭11大 政）
金五千円也　神吉　等（昭11専二商）
金五千円也　吉田寺之助（在学生父兄）
金参千円也　柏原　信次（〃）
金参千円也　遠藤　吉次（昭7専 法）
金参千円也　小山　幸男（昭10大 法）
金参千円也　川端　岬（昭16専一法）
金参千円也　高砂恒三郎（大13専 法）
金参千円也　岡　清一郎（在学生父兄）
金参千円也　小西　幸男（〃）
金参千円也　有坂　忠志（〃）
金弐千円也　谷光　鶴一（〃）
金弐千円也　中尾　正義（〃）
金弐千円也　佐藤　一二（〃）
金弐千円也　清水　愛明（〃）
金弐千円也　勢志久治郎（〃）
金弐千円也　石原　一雄（〃）
金弐千円也　東田音治郎（〃）
金弐千円也　金子　誉士（〃）
金弐千円也　中田　茂吉（〃）
金弐千円也　入福金之助（〃）
金弐千円也　峰本　勝義（昭25学一経）
金弐千円也　上田哲次郎（在学生父兄）
金弐千円也　森岡　享二（〃）
金弐千円也　株式会社　清水工業所
金弐千円也　岸本　好正（在学生父兄）
金壱千五百円也　辰田　弁一（〃）
金壱千円也　小西　公彦（昭22大 法）
金壱千円也　植田　秀男（昭19大 法）
金壱千円也　垣津硝子店
金壱千円也　渡辺商店
金壱千円也　岸本　忠雄（大13専 商）
金壱千円也　廐野正千代（昭28学二法）
金壱千円也　島田　信一（昭5大 経）
金壱千円也　一瀬　泰男（昭28学一商）
金壱千円也　赤坂　惠龍（明37 法）
金壱千円也　田中　実夫（昭8専二法）
金壱千円也　中山　一義（昭13専二法）
金壱千円也　平田栄一郎（昭10専二法）
金壱千円也　栗木原臣一（昭24大 経）
金壱千円也　尾上　圭一（昭16専二経）
金壱千円也　金谷　信助（昭27学一経）
金壱千円也　今中　美巳（昭10専二商）
金壱千円也　辻　茂（大13専二商）
金壱千円也　東田　憲二（大14大 法）
金壱千円也　植西　猶雄（昭16専二法）
金壱千円也　方野木義雄（昭12専二法）
金壱千円也　青木　久雄（昭27学二法）
金壱千円也　沢田養之助（昭16専二商）
金壱千円也　中西　忠孝（昭6専二法）
金壱千円也　服部　福次（昭6専二法）
金壱千円也　文夫（昭28学一法）
金壱千円也　駒雄（昭8大 法）
金壱千円也　竹内　俊郎（昭24専二法）
金壱千円也　山本　栄夫（専）
金壱千円也　辻原　弘（昭13専二法）
金壱千円也　内海　利男（昭27学二法）
金壱千円也　早稲田裕栄（昭27学二法）
金壱千円也　野原　保（昭11専一商）
金壱千円也　英　喜照（昭23大 経）
金壱千円也　大和　宗一（昭26学二法）
金壱千円也　長尾　正弘（昭12大 法）
金壱千円也　仲　実（昭12大 法）
金壱千円也　山崎　誠（在学生父兄）
金壱千円也　東　續（〃）
金壱千円也　小阪与十郎（〃）
金壱千円也　フロアー商会
金壱千円也　田ノ岡吉広（在学生父兄）
金壱千円也　多田　精一（〃）
金壱千円也　秦　寛一（〃）
金壱千円也　神保　正一（〃）
金壱千円也　植　源三（〃）
金壱千円也　竹村　隆助（〃）
金壱千円也　大津　武二（〃）
金壱千円也　三好ミトメ（〃）
金壱千円也　公江　貞雄（〃）

金壱千円也　青木豊治郎（在学生父兄）
金壱千円也　津川　鑑一（昭6専　経）
金壱千円也　伴　栄初（在学生父兄）
金壱千円也　中谷正由喜（〃　〃）
金壱千円也　小畑甚三郎（〃　〃）
金壱千円也　藤本　勇雄（〃　〃）
金壱千円也　玉井　盤夫（〃　〃）
金壱千円也　牧野　謙（〃　〃）
金壱千円也　田中清太郎（〃　〃）
金壱千円也　増田　喜市（〃　〃）
金壱千円也　平野　永二（〃　〃）
金壱千円也　吉田　克巳（〃　〃）
金壱千円也　桑原　政（〃　〃）
金壱千円也　亀有　健次（〃　〃）
金壱千円也　村井清太郎（〃　〃）
金壱千円也　朝倉　佐一（〃　〃）
金壱千円也　紀伊　彌吉（〃　〃）
金壱千円也　秦　孝恒（〃　〃）
金壱千円也　大室　清（〃　〃）
金壱千円也　吉田ヒサ子（〃　〃）
金壱千円也　英　喜久（〃　〃）
金壱千円也　太田耕二郎（〃　〃）
金壱千円也　生田　幸作（〃　〃）
金壱千円也　大山　英治（〃　〃）
金壱千円也　田中三喜藏（明37法）
金壱千円也　野村　剛（昭26専二法）
金壱千円也　德村　行孝（在学生父兄）
金壱千円也　末岡　捨吉（〃　〃）
金壱千円也　荒木喜太郎（〃　〃）
金壱千円也　新田　仲道（〃　〃）
金壱千円也　越前屋傳吉（〃　〃）
金壱千円也　梶原　靖和（〃　〃）

金九拾五萬円也

内訳（才一、才二回合計額）

金貳拾萬円也　白川　朋吉（理事長）
金拾八萬円也　久井　忠雄（専務理事）
金拾萬円也　岩崎　卯一（学長理事）
金七萬円也　矢野　文雄（常務監事）
金五萬円也　宇佐美正祐（理事）
金五萬円也　木村　健助（〃　〃）
金五萬円也　西本　寛一（〃　〃）
金五萬円也　春原源太郎（〃　〃）
金五萬円也　宮島　綱男（〃　〃）
金五萬円也　森川　太郎（〃　〃）
金五萬円也　西村治三郎（監事）
金五萬円也　西尾専太郎（〃　〃）

金八萬八千円也　第一高校教育職員

内訳

金壹万円也　矢口　家治（校長）
金八千円也　四辻　詮（教頭）
金五千円也　下島　光（教諭）
金五千円也　藤木栄次郎（〃　〃）
金五千円也　勝島　芳松（〃　〃）
金五千円也　川村　善助（〃　〃）
金五千円也　佐々木康雄（〃　〃）
金五千円也　原　雄次郎（〃　〃）
金参千円也　平田　善明（〃　〃）
金参千円也　長谷川雅樹（〃　〃）
金参千円也　黒岩　博（〃　〃）
金参千円也　馬渡樟兵衛（〃　〃）
金参千円也　奥村　二郎（〃　〃）
金参千円也　富田恭二郎（〃　〃）
金参千円也　半井　清（〃　〃）
金参千円也　土部　弘（〃　〃）
金参千円也　堀江　藤晶（〃　〃）
金参千円也　栗駒　正和（〃　〃）
金参千円也　中小路泰夫（〃　〃）
金参千円也　浜口　誠也（〃　〃）
金参千円也　渡辺加多二（〃　〃）
金参千円也　西岡　宸（〃　〃）

金七萬八千円也　第一中学校教育職員

内訳

金壹万五千円也　三島　律夫（校長）
金壹万円也　政井　武（教諭）
金五千円也　岡持敬次郎（〃　〃）
金五千円也　小林　清太（〃　〃）
金五千円也　富永　敬夫（〃　〃）
金五千円也　原田　勇（〃　〃）
金五千円也　吉川　秀義（〃　〃）
金四千円也　古川　多（〃　〃）
金参千円也　市田彌一郎（〃　〃）
金参千円也　陰山　晃雄（〃　〃）
金参千円也　佐橋　滋夫（〃　〃）
金参千円也　高橋　猛（〃　〃）
金参千円也　中野　真作（〃　〃）
金参千円也　吉富　二郎（〃　〃）
金弐千円也　木村　昌三（〃　〃）
金弐千円也　清水　邦郎（〃　〃）
金弐千円也　岩倉　猛利（〃　〃）

金九拾八萬四千円也　事務職員

内訳

金参萬五千円也　桂　忠雄（評議員　経理局）
金参萬円也　池田信之助（評議員　法文教務課）
金貳萬五千円也　安井章吾（校友課）
金貳萬円也　土橋　四三（天六教務課）
金貳萬円也　天野敬太郎（千里山図書館）
金貳萬円也　平井　三朗（評議員　就職厚生課）
金貳萬円也　斎藤　善三（天六学生課）
金貳萬円也　鈴木　末広（天六教務課）
金貳萬円也　田中　一郎（秘書課）
金貳萬円也　旦　菊男（一高教務課）
金壹万五千円也　鉄井　良男（千里山学生課）
金壹万五千円也　田中治良大夫（天六学生課）
金壹万五千円也　永野　治（法文教務課）
金壹万五千円也　木戸　一郎（法文教務課）
金壹万貳千円也　後藤　謙昭（一高教務課）
金壹万円也　德田誠一郎（大学院教務課）
金壹万円也　永野　三郎（経商教務課）
金壹万円也　齋藤　政信（医務課）
金壹万円也　中山　厳（天六学生課）
金壹万円也　山脇　智（天六学生課）
金壹万円也　山村　彰（千里山学生課）
金壹万円也　天野　宗一郎（就職課）
金壹万円也　吉田申一郎（〃　〃）
金壹万円也　川澄　秋一（〃　〃）
金壹万円也　宮脇慎三郎（〃　〃）
金壹万円也　城内　俊直（〃　〃）

金壹万円也 山口辰男（天六 教務課）
金壹万円也 中江巽（〃 〃）
金壹万円也 秋山剛（校友 課）
金八千円也 松本弘（天六 学生課）
金八千円也 森浩志（法文 教務課）
金八千円也 有福健（〃 〃）
金八千円也 佐伯博臣（天六 教務課）
金七千円也 松家繁一（法文 教務課）
金七千円也 山元文雄（〃 〃）
金七千円也 高木新（〃 〃）
金六千円也 赤松祐玄（一高 図書館）
金六千円也 山本景造（天六 学生課）
金五千円也 羽野堅二（出 版 課）
金五千円也 大山綱憲（千里山図書館）
金五千円也 松本長右衛門（会 計 課）
金五千円也 村上仙三（庶 務 課）
金五千円也 阪本銀之助（営 繕 課）
金五千円也 岡田武司（秘 書 課）
金五千円也 辻見重行（〃 〃）
金五千円也 金田雅一（〃 〃）
金五千円也 酒井彦一（〃 〃）
金五千円也 山景耕作（〃 〃）
金五千円也 横山茂昭（天六 学生課）
金五千円也 出水泰祐（千里山学生課）
金五千円也 塩崎三郎（〃 〃）
金五千円也 小幡務厚（生 課）
金五千円也 西尾康（〃 〃）
金五千円也 山中林三（天六 教務課）
金五千円也 野原博（一高 会 計）
金五千円也 渓瀬義雄（法文 教務課）
金五千円也 藤井義男（〃 〃）
金五千円也 上田彌三郎（庶 務 課）
金五千円也 北岡終一郎（天六 教務課）
金四千五百円也 原幸作（会 計 課）
金四千五百円也 片岡横次郎（用 度 課）
金四千五百円也 山路貞藏（会 計 課）
金四千円也 大沢寛治郎（千里山図書館）
金参千五百円也 鈴木得稔（会 計 課）
金参千五百円也 郡司英雄（用 度 課）
金参千五百円也 穴田元治（営 繕 課）
金参千五百円也 田村桂一（医 務 課）
金参千五百円也 増田実（庶 務 課）
金参千五百円也 北岡九千九之助（法文教務課）
金参千五百円也 速水勇千代（〃 〃）
金参千五百円也 米田ヨネ（〃 〃）
金参千五百円也 伊藤保（千里山図書館）
金参千五百円也 中村富夫（天六 図書館）
金参千五百円也 藤本龍造（〃 〃）
金参千五百円也 渡辺五郎（千里山図書館）
金参千円也 松本俊（営 繕 課）
金参千円也 植村憲三郎（会 計 課）
金参千円也 杉原常彦（秘 書 課）
金参千円也 八島妙子（〃 〃）
金参千円也 小西芳子（〃 〃）
金参千円也 藤井静枝（〃 〃）
金参千円也 大渓永子（医 務 課）
金参千円也 磯矢健吉（庶 務 課）
金参千円也 河野ツヤ子（〃 〃）
金参千円也 下村松次郎（〃 〃）
金参千円也 田中龜代治（〃 〃）
金参千円也 四井庄太郎（〃 〃）
金参千円也 横田美壽子（天六 学生課）
金参千円也 盛清子（〃 〃）
金参千円也 芳田文子（千里山学生課）
金参千円也 古志祐一（就 職 課）
金参千円也 石橋直造（天六 教務課）
金参千円也 安宅雅夫（〃 〃）
金参千円也 大浦まさ（一 高）
金参千円也 山野幾松（〃 〃）
金参千円也 龜井富之助（〃 〃）
金参千円也 永易愍太郎（一 中）
金参千円也 武田正夫（法文 教務課）
金参千円也 水口博喜（〃 〃）
金参千円也 山本チカ（経商 教務課）
金参千円也 広永栄（〃 〃）
金参千円也 中山義一（〃 〃）
金参千円也 土肥治一郎（幼 稚 園）
金参千円也 萬里小路通宗（千里山図書館）
金参千円也 荒木淑子（〃 〃）
金参千円也 中川義信（天六 図書館）
金弐千五百円也 西原セイ（会 計 課）
金弐千五百円也 西村富美子（〃 〃）
金弐千五百円也 水野敏雄（会 計 課）
金弐千五百円也 細部栄三郎（営 繕 課）
金弐千五百円也 田中美津子（庶 務 課）
金弐千五百円也 小谷久子（〃 〃）
金弐千五百円也 岸田要次郎（〃 〃）
金弐千五百円也 杉島治郎（〃 〃）
金弐千五百円也 室井ふく（〃 〃）
金弐千五百円也 石田すえ（〃 〃）
金弐千五百円也 井上静子（〃 〃）
金弐千五百円也 棚田ひさの（〃 〃）
金弐千五百円也 高田静子（〃 〃）
金弐千五百円也 野元喜藏（〃 〃）
金弐千五百円也 山本亥太郎（〃 〃）
金弐千五百円也 上田久子（〃 〃）
金弐千五百円也 山下正隆（天六 教務課）
金弐千五百円也 阪本龍三（〃 〃）
金弐千五百円也 工藤まさの（一 中）
金弐千五百円也 氏原みの（法文 教務課）
金弐千五百円也 田熊謂津子（千里山図書館）
金弐千五百円也 森川彰（〃 〃）
金弐千五百円也 大橋勲（天六 図書館）
金弐千五百円也 井村昌子（〃 〃）
金弐千五百円也 増原佐智子（〃 〃）
金弐千五百円也 向井喜代子（大学院教務課）
金弐千五百円也 前田房吉（庶 務 課）
金弐千円也 西沢子（会 計 課）
金弐千円也 木林絹子（〃 〃）
金弐千円也 森本甫（営 繕 課）
金弐千円也 平井義美（〃 〃）
金弐千円也 渡辺延子（会 計 課）
金弐千円也 多田幸子（医 務 課）
金弐千円也 加藤智子（出 版 課）
金弐千円也 寺岡正子（庶 務 課）
金弐千円也 谷千代（〃 〃）
金弐千円也 宮井光子（〃 〃）
金弐千円也 中地三雄（〃 〃）
金弐千円也 北村秀子（〃 〃）
金弐千円也 森セツ（〃 〃）
金弐千円也 植田ミサエ（〃 〃）
金弐千円也 石田フジエ（〃 〃）
金弐千円也 坪内貞（天六 教務課）
金弐千円也 赤松猛（〃 〃）
金弐千円也 伊勢計典（〃 〃）
金弐千円也 横田育子（一高 教務課）
金弐千円也 上山喜雄（〃 〃）
金弐千円也 高瀬欣和（〃 〃）
金弐千円也 木田朋子（一高 図書館）
金弐千円也 松永稔（一高 教務課）
金弐千円也 池田ミツ（一 中）
金弐千円也 山中葉子（法文 教務課）
金弐千円也 市山久栄（〃 〃）

金弐千円也　稲置　和子（〃　〃）
金弐千円也　三浦　洋子（経商　教務課）
金弐千円也　小西愛之助（〃　〃）
金弐千円也　今村　公子（〃　〃）
金弐千円也　西本　晞（大学院教務課）
金弐千円也　梶山　絹（〃　〃）
金弐千円也　山崎　節（〃　〃）
金弐千円也　真下香代子（千里山図書館）
金弐千円也　宮中　市子（〃　〃）
金弐千円也　堀尾　洋子（〃　〃）
金弐千円也　上之山慶一（〃　〃）
金弐千円也　船引潤一郎（〃　〃）
金弐千円也　上林　邦子（〃　〃）
金弐千円也　大場　義之（〃　〃）
金弐千円也　松下　健次（〃　〃）
金弐千円也　広野壽美子（〃　〃）
金弐千円也　今村　嘉之（天六　図書館）
金弐千円也　加藤　幸広（〃　〃）
金弐千円也　大西壽美子（校　友　課）
金弐千円也　橋長　菊子（〃　〃）
金弐千円也　勢井　かう（〃　〃）
金壱千五百円也　山口　秀児（会　計　課）
金壱千五百円也　面下喜久子（〃　〃）
金壱千五百円也　丸山喜三江（〃　〃）
金壱千五百円也　松尾　京子（庶　務　課）
金壱千五百円也　菊井　久吉（〃　〃）
金壱千五百円也　田中　忠雄（〃　〃）
金壱千五百円也　上江　正久（〃　〃）
金壱千五百円也　福西　照子（〃　〃）
金壱千五百円也　若林志津江（〃　〃）
金壱千五百円也　淡野　明子（〃　〃）
金壱千五百円也　茅野　成見（〃　〃）
金壱千五百円也　岡　末弘（〃　〃）
金壱千五百円也　酒井　敏江（千里山学生課）
金壱千五百円也　野口　末吉（〃　〃）
金壱千五百円也　古樫　藤一（〃　〃）
金壱千五百円也　土井原雅夫（法文　教務課）
金壱千五百円也　神村　俊一（〃　〃）
金壱千五百円也　吉岡　達郎（経商　教務課）
金壱千五百円也　睦好　貞子（〃　〃）
金壱千五百円也　松岡　勇（〃　〃）
金壱千五百円也　木下　正信（千里山図書館）
金壱千五百円也　上田　幸子（〃　〃）
金壱千五百円也　木村　法親（〃　〃）
金壱千五百円也　水谷　道子（〃　〃）
金壱千五百円也　徳田　綾子（天六　図書館）
金壱千五百円也　土肥　菅子（〃　〃）
金壱千円也　河野すみ代（秘　書　課）
金壱千円也　岩下　欣哉（千里山学生課）
金壱千円也　吉村　安夫（天六　教務課）
金壱千円也　江原　静雄（〃　〃）
金壱千円也　福永　栄（〃　〃）
金壱千円也　大和　稠（〃　〃）
金壱千円也　石田　幸一（〃　〃）
金壱千円也　東浦満智子（〃　〃）
金壱千円也　稲置　啓一（〃　〃）
金壱千円也　山本　忠子（〃　〃）
金壱千円也　山本　泰正（〃　〃）
金壱千円也　田尾　馴次（〃　〃）
金壱千円也　小谷　信隆（一高　教務課）
金壱千円也　小杉　浩（一高　図書館）
金壱千円也　渡辺みち子（一　高）
金壱千円也　渡辺百合子（幼　稚　園）
金壱千円也　小林　和子（〃　〃）
金壱千円也　荒木　道子（〃　〃）
金壱千円也　橋田千代子（〃　〃）

合計　金七百八拾五萬壹千五百円也

累計

金壹千貳百九拾貳萬壹百円也

関西大学創立七十周年記念拡充資金寄附募集以来、陸続と多額の御芳志をいただいてをりますが、前号までの御寄附者の芳名を、甚深な謝意を表しつゝ重ねてこゝに録します

關西大學七十周年記念拡充資金寄附者芳名（一）

昭和二十八年十一月三十日現在（敬称略）

金百万円也　久大紡績株式会社
金百万円也　竹中工務店（才一回分）
金五拾万円也　昭和六会（才一回分）
金五拾円万也　吉本興業株式会社
金五拾万円也　近畿電気工事株式会社
金貳拾五万円也　大阪城口研究所（才一回分）
金拾万円也　大和銀行天六支店
金拾万円也　日本勧業銀行梅田支店
金貳拾七万円也　十期会（才一回分）

内訳

金拾万円也　野間秀泉
金四万円也　矢野文雄（評議員）
金弐万円也　福岡彰郎
金壱万円也　江里口春志（評議員）
金壱万円也　河内兼三
金壱万円也　田中寿蔵
金壱万円也　竹沢喜代治（評議員）
金壱万円也　塚本義昭
金壱万円也　東條顕義
金壱万円也　長谷川清一
金壱万円也　松谷連哉
金壱万円也　森下善雄
金壱万円也　柳田栄次
金壱万円也　山中輝司

金壹万五千円也　松村源次郎（昭2専　法）
金壹万円也　寺浦留三郎（昭10大　法）
金壹万円也　藤原　龍太（推　薦）
金七千五百円也　有賀　司郎（昭6　会）
金七千五百円也　中村　定二（昭16専二法）
金参千円也　鈴木　八郎（在学生父兄）
金弐千円也　竹内　勲（大15専　法）
金弐千円也　松嶋　享（昭21大　経）
金弐千円也　井野　仙周（在学生父兄）
金弐千円也　今井三次郎（〃　〃）
金壱千円也　安西　一郎（昭25学一国）
金壱千円也　因野　昭（昭22専二商）
金壱千円也　北村　学（昭14専二国）
金壱千円也　石丸　曼（大9専　商）
金壱千円也　小島　龍夫（昭26学一国）
金壱千円也　大越　務（明37　法）
金壱千円也　広橋　正一（昭26学一法）
金壱千円也　深田　丈夫（昭14大　法）
金壱千円也　松川　孟一（大11専　法）
金壱千円也　吉村　種蔵（明30　法）
金壱千円也　和田　信蔵（昭8大　法）
金壱千円也　高林　鳳（昭25学一法）
金壱千円也　高橋　文惠（昭8専二法）
金壱千円也　小田　静男（昭16専二法）
金壱千円也　原田市之進（明39専　法）
金壱千円也　不動　健治（大9大　商）
金壱千円也　村岡　道久（昭18専二法）
金壱千円也　野口　茂樹（昭4大　法）
金壱千円也　吉田　孝蔵（昭27学二法）

金壱千円也　辻本　徳充（在学生父兄）
金壱千円也　春名卓次郎（〃）
金壱千円也　藤井　貞朝（〃）
金壱千円也　坊岡　敏郎（〃）
金壱千円也　鍛治　トク（〃）
金壱千円也　上農市三郎（〃）
金壱千円也　要　房行（〃）
金壱千円也　野瀬　清（〃）
金壱千円也　江南　留吉（〃）
金壱千円也　増田　金一（〃）
金壱千円也　竹原　金吾（〃）
金壱千円也　木村十三徳（〃）

學校法人役員（才一回分）

金拾万円也　岩崎　卯一（学長　理事）
金拾万円也　白川　朋吉（理　事　長）
金拾万円也　久井　忠雄（専務理事）
金四万円也　矢野　文雄（常務監事）
金貳万円也　宇佐美正祐（理　事）
金貳万円也　木村　健助（〃）
金貳万円也　西本　寛一（〃）
金貳万円也　春原源太郎（〃）
金貳万円也　宮島　綱男（〃）
金貳万円也　森川　太郎（〃）
金貳万円也　西村治三郎（監事）
金貳万円也　西尾専太郎（〃）
合計　金四百六拾六万四千五百円也

關西大學七十周年記念
拡充資金寄附者芳名（二）

昭和二十九年一月十九日現在（順序不同、敬称略）

金貳拾万円也　住友信託銀行株式会社
金五万円也　武田藏之助（評議員推薦校友）
金参万円也　山崎　敬義（評議員校友会神戸支部長大14大法）

金壹万円也　永井　芳一（十期会才二回分）
金壹万円也　木村　秀吉（在学生父兄）
金五千円也　谷口　隆佳（大15大　法）
金参千円也　江尻　慈郎（在学生父兄）
金参千円也　西村　誠一（〃）
金参千円也　松本　つゆ（〃）
金弐千円也　水谷喜三男（〃）
金弐千円也　下山　二一（〃）
金弐千円也　岩見　実（昭14専二商）
金弐千円也　村田俊一郎（昭26学一商）
金弐千円也　川端　勇（在学生父兄）
金弐千円也　真柄　英吉（〃）
金弐千円也　竹内理一郎（〃）
金弐千円也　奥本　衛一（〃）
金弐千円也　井野　藤吉（〃）
金弐千円也　丁野　忠春（〃）
金弐千円也　久保　岩男（〃）
金壱千円也　和久田二郎（昭16学一経）
金壱千円也　佳岡　藤一（昭14専二経）
金壱千円也　楠田　寅三（昭5専　法）
金壱千円也　中尾　宣雄（昭12大　経）
金壱千円也　山脇　修（昭18専一経）
金壱千円也　森　正十之（昭25大　政）
金壱千円也　藤野　春三（昭7大　経）
金壱千円也　後藤　正身（昭10大　法）
金壱千円也　原田美都枝（昭26学二国）
金壱千円也　小倉喜八郎（昭18専二商）
金壱千円也　今仲三木雄（昭26専二商）
金壱千円也　平岡　巖（昭26学二国）
金壱千円也　佐野　広治（大6専　法）
金壱千円也　藤田　哲夫（昭8専二法）
金壱千円也　勝間五十吉（昭14大　法）
金壱千円也　大川原与一（昭9専二経）
金壱千円也　伊藤　保（昭17専二経）
金壱千円也　延広　一明（昭28学一商）
金壱千円也　吉本　房造（昭10専一法）
金壱千円也　山下　勇次（昭16大　政）
金壱千円也　工藤　正義（昭24大　法）
金壱千円也　野村　功（昭14大　商）
金壱千円也　河内　啓三（昭17大　商）
金壱千円也　鈴置　正雄（昭19大　政）
金壱千円也　加藤　常雄（昭10専二経）
金壱千円也　木原　俊夫（昭18専一経）
金壱千円也　山本　晴雄（昭27学一商）
金壱千円也　半那　賢三（昭17専一経）
金壱千円也　鮒子田繁太郎（昭5大法）
金壱千円也　松村　昌一（昭12専二商）
金壱千円也　塩田　亮（昭26学一法）
金壱千円也　満留　正夫（在学生父兄）
金壱千円也　吉田真次郎（〃）
金壱千円也　角田彌三兵衛（〃）
金壱千円也　貞包　超雄（〃）
金壱千円也　荘田　林造（〃）
金壱千円也　松永　徳治（〃）
金壱千円也　杉村作太郎（〃）
金壱千円也　馬場　円吉（〃）
金壱千円也　岩原寅次郎（〃）
金壱千円也　竹中　安太（〃）
金壱千円也　大城　勇造（〃）
金壱千円也　島津　徳三（〃）
金壱千円也　松原　やの（〃）
金壱千円也　神谷チヨノ（〃）
金壱千円也　平田　泰造（〃）
金壱千円也　宮崎　八郎（〃）
金壱千円也　吉川　錦治（〃）
金壱千円也　山岡哲志士（〃）
金壱千円也　伊賀　本松（〃）
金壱千円也　溝口　主雄（〃）
金壱千円也　野村　宮繁（〃）
金壱千円也　佐藤　高夫（〃）
金壱千円也　吉田　一雄（〃）
金壱千円也　小林　喜六（〃）
金壱千円也　西丸　一雄（〃）
金壱千円也　松本　義男（〃）
金壱千円也　角田　紀郎（〃）
金壱千円也　阪本　輝太（〃）
金壱千円也　中村栖治郎（〃）
金壱千円也　下川　茂（〃）
金壱千円也　広瀬芳太郎（〃）
金壱千円也　岩田　公平（〃）
金壱千円也　中村梅次郎（〃）
金壱百円也　高田　英次（〃）

小計　金四拾萬壹百円也

合計　金五百六萬四千六百円也

昭和二十九年三月十五日発行
關西大學學報　第二六七號
大阪市大淀区長柄中通二丁目一二番地
編集兼発行人　久井忠雄
大阪市北区川崎町三八
印刷所　株式会社ナニワ印刷所
電話堀川（七三〇二番）（三一九三番）
大阪市大淀区長柄中通二丁目
発行所　關西大學學報局
電話堀川（35）一七五六番
振替大阪二六七七二番
一年誌代　実費三〇〇円（送料共）

関西大学創立七十周年記念
拡充資金募集趣意書

わが関西大学は、明治十九年河内町の一隅に、大阪に於ける唯一の法律学校として開校したのでありますが、爾来六十有余年校友先輩の苦心と不断の努力に依つて目覚ましい発展を遂げ、今や一万数千の学徒を擁する私学の雄として、自他共に許す一大学園となりました。其の間幾多の俊英を輩出して、文化の向上、国家社会の進運に大きな寄与をなし得たことは、われわれの深く喜びとするところであります。学園発展のために尽瘁せられたそれらの先輩各位に対しては深甚の敬意と感謝を捧げずには居られません。

日本は、漸く独立国家として出発しましたが、国家の前途は甚だ多難であります。わが国は今後、文化国家として世界文化に貢献すべきであります、またそれによつて友邦の信に応えなければなりませんが、そのためには、教育の振興こそ最も緊要な問題であります。

本校は、大学の崇高な使命を自覚すると共に、歴史と伝統に立脚して、よくその声価を揚げて参りましたが、真理の討究、学の実化という理想に向つて、益々邁進したいと思います。本学が新学制に基き、各大学にさきがけて、大学院を設置し、修士課程並びに博士課程を開講したのも要は、その意味において将来の飛躍的な発展を意図したからに外なりません。

本学は時代の趨勢に鑑み、曩に五ヶ年計画を樹て、諸施設の改善充実に着手致しました。千里山における大学院、大学ホール、経済学部商学部教室の増築等はその一環として既に竣工しましたが、なお計画中の事業で、しかも緊急を要するものが種々残されて居ります。即ち、使用上すでに危険な状態にある、千里山法学部文学部学舎の改築、二部学生を収容するための天六学舎の増築、学生に対する施設の一部として、千里山尚志館（学生食堂学友会部室）の増改築等でありますが、これらは逐次工事に着手し或は着工準備中であります。また教授研究室は、現在六十五室を有するに至つたのでありますが、その大部分は、臨時的なもので、更に近代的設備を持つ研究室の新築を構想中であります。これらが竣工の暁には学園は全く面目を一新すると思います。

こうした外観の整備と相俟つて、特に重要なものは、大学の真価を決する教授陣容の充実であります。二十八会計年度においては教授十名、助教授八名、専任講師五名、助手十七名の増員を予定しましたが、その大半はすでに補充致しました。

教職員の待遇については、常にこれが改善に努め、本年度においても相当額の増俸を実施致しました。しかしなお現下の経済状態に即応すべき所期の目的を十分に達し得て居ないのを遺憾と致します。

教授陣容の充実と共に、研究用図書の完備も大切でありますが、この点についても目下鋭意努力して居ります。

さて、上記の事柄は、いづれも緊急を要するもののみと考えられますが就中、学舎の増改築は、最早一日も遷延を許しませんので、これを早急に達成するため、昭和三十年度に創立七十周年を迎えるのを機会に、その記念事業の一部として実施することに致しました。しかも、建築費だけでも総額約三億円を要するのでありますが、戦後の経済的混乱により本大学法人の経理も、種々困難な事情を加えており、従つて事業遂行の資金は、止むを得ず関係者各位その他の御援助により御醵出を仰がねばならぬ実情にあります。

大学の生命は不朽でありますが、学園の生々発展を希うためには、各位の学園に寄せられる深い愛情と熱意に俟たねばなりません。翼くは、学園の繁栄を念願する各位の御賛同を請い、この七十周年記念事業の完成を期したいと思います。各位の御賛同により本事業完成の暁には、学園はさらに新たな基盤に立つて飛躍的な発展を期し得ることを信じます。何卒御協力の程切に願上げます。

昭和二十八年十一月

関西大学学長　岩崎卯一
関西大学理事長　白川朋吉

創立七十周年記念事業学舎増改築概要

一、工事費総額約三億三千五百万円

二、工事概要

(一) 千里山法学部文学部学舎改築（鉄筋コンクリート造）
三階建　二千六百六十八坪　工費約二億六千四百万円

(二) 天六学舎増築（鉄筋コンクリート造）
五階建　三百七十八坪　工費約三千万円

(三) 千里山尚志館増改築（木造）二階建　三百二十一坪　工費約六百万円

(四) 関西大学第一高等学校の千里山外苑への移転新築（一・二階鉄筋三階木造）三階建　七百八十五坪　工費約三千五百万円

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和二十九年三月十五日発行（毎月一回十五日発行）